1997年10月15日発行通算105号

COMIC BOX

FOR COMIC, CARTOON and ANIMATION Fan in Japan, Asia & all over the world

[コミックボックス]

HOMEPAGE URL:http://www.ask.or.jp/~comicbox/
1997 October volume 105
1997 10 750 yen



特集・夏のアニメを斬る!

エヴァンゲリオンとは何だったのか

友成純一／大森望

同人作家によるエヴァ作品集

もののけ姫／ウォレスとグルミット

ジャングル大帝／ヘラクレス／エルマーの冒険

おかだえみこ／米沢嘉博／叶精二／細谷隆広／寺村摩耶子

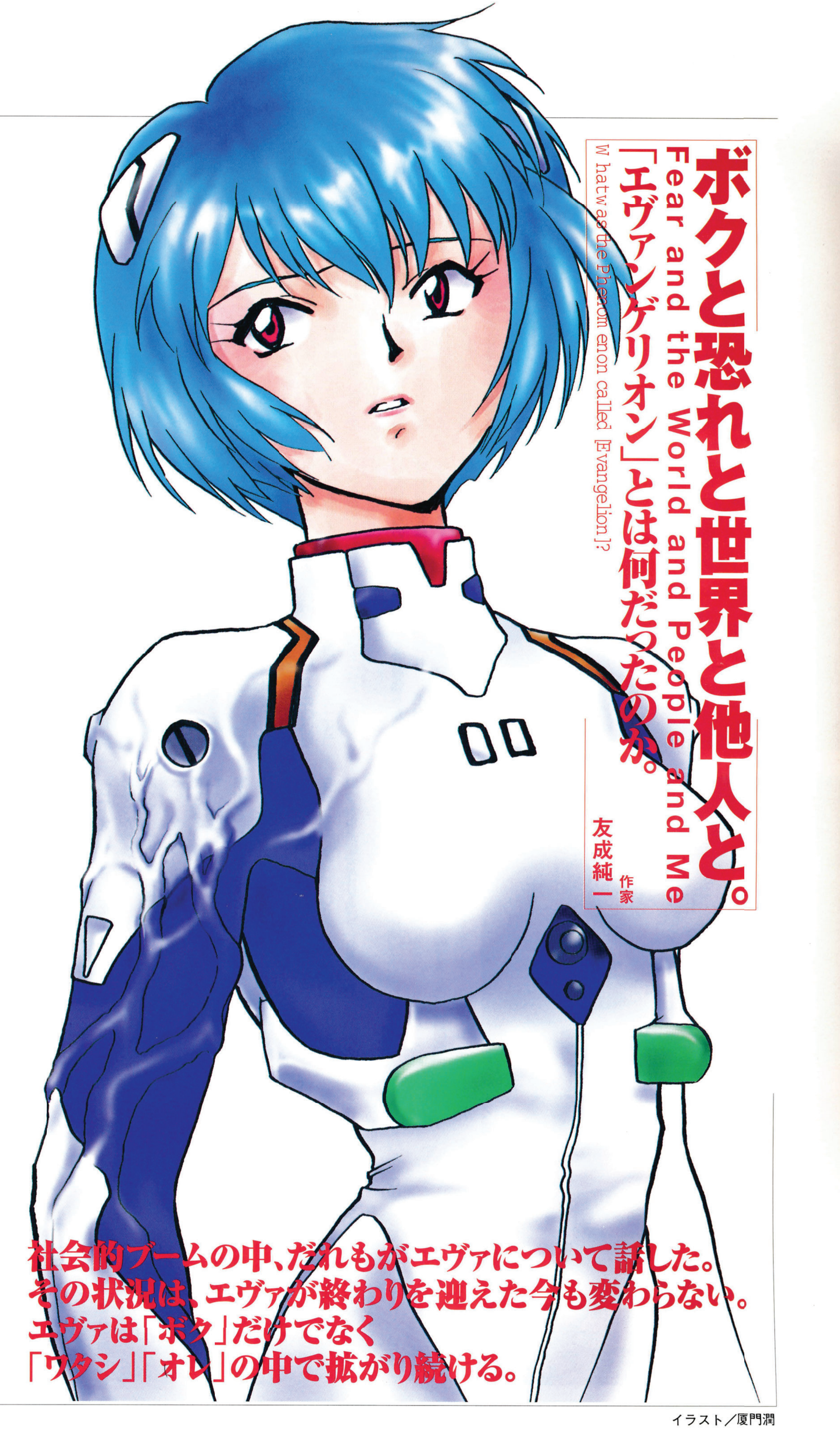
ボクと恐れと世界と他人と。

Fear and the World and People and Me

「エヴァンゲリオン」とは何だったのか。

What was the Phenomenon called [Evangelion]?

作家　友成純一



**社会的ブームの中、だれもがエヴァについて話した。
その状況は、エヴァが終わりを迎えた今も変わらない。
エヴァは「ボク」だけでなく
「ワタシ」「オレ」の中で拡がり続ける。**

イラスト／厦門潤

「エヴァンゲリオン」――シンジを見ていると苛めたくなる！

巷で絶大な人気を誇る「エヴァンゲリオン」シリーズだが、最近の私はかつてほどテレビの商業アニメに興味がなくなっており、ほとんど関心がなかった。シリーズ途中の何話かをたまたま目にしたことはあるが、複雑な人間関係とテーマを内包したシリーズの常として、途中のエピソードだけを見ても何をやっているか判らない。いや、これが十年前、二十年前であれば、断片からでもピンと理解してしまう部分があるのかもしれないが、齢四十を過ぎた今、もはやそうした感性を失ってしまっているらしい。

それにははっきり言って、私はもうロボット・アニメには辟易しているのだ。永井豪の「マジンガーZ」に始まり、「超時空要塞マクロス」「機動戦士ガンダム」「銀河 漂流バイファム」「戦国魔神ゴーショーグン」「伝説巨神イデオン」そして割りに最近の「機動警察パトレイバー」まで、いったいどれだけのロボット・アニメ・シリーズが作られてきたことだろう。たまたま見たエピソードの幾つかと、周囲から聞いた話を総合して私は、「なんだ、〈ガンダム〉と〈イデオン〉を足して二で割ったような話か……若いアニメ・ファンならともかく、私が今さらそんなもんを見ても」と、世間で評判になればなるほど白け返った。

そんな風なので、劇場版の第一作は見に行かなかった。「とにかく混んでいる」と聞き、小汚い(失礼)オタクどもと肘付き合わせて映画を見るなんて真っ平御免と、敬遠したのだ。そして劇場版第二作「完結編」を、初めて映画館で見た。なぜこのシリーズにあまり興味を持てずにいたのか、スクリーンで対峙して納得できた。私はどうやら、あの碇シンジが嫌いらしい。なんだ、あの煮え切らないウジウジした態度は！ 周りが何を言っても、「嫌だよ」と「出来ないよ」と「ぼくはダメなんだ」しか言わない。すぐに泣くし、泣いてもすまないとなるとうずくまって口を利かなくなる。ミサトではないが、「あんた、男の子でしょう、しっかりしなさいよ！」と怒鳴り付けたくなる。私が中学生か高校生で、同じクラスにこんなボンクラがいたら、間違いなく苛め殺している。

人気のある作品やシリーズは、それが大衆的で低俗とみなされるものであればあるほど、時代の空気を呼吸している。かつてのスプラッタ・ホラーがそうだったように。今、悪し様に書いているが、「エヴァンゲリオン」を見て苛々するのは、私がもはや時代について行けなくなったからなので、「エヴァンゲリオン」の真価とは何の関係もないことを申し添えておく。

学校での苛めが社会問題化して、いったい何年になるのだろうか。最初は小学校での苛めだったが、それが中学に波及し、最近では高校生まで苛めを苦に自殺している。本作のシンジを見ていると、そんな現代の風潮を映し出しているように思う。シンジの煮え切らない、「嫌だよ」「出来ないよ」「ぼくはダメなんだ」の態度は、苛められっ子がなぜ苛められるかをよく示していると同時に、多かれ少なかれ、現代のどの中学生・高校生(ひょっとすると大学生)の心理にも共通するのではないか。他者に触れて自我が破壊されるのを恐れ、年柄年中ウォークマンのイヤフォンで耳を塞いでいる。パソコンとビデオさえ与えておけば、もはや自分の部屋から外には出て来なくなるタイプである。

「嫌だ、嫌だ」と言い続けたところで、人間は一人で生きてゆけるものではない。どこかで結局は、人に接さざるをえなくなる。そして、他者との関係における自分を、客観的に見ないわけにはゆかなくなる。そうなった時、彼らは、唐突に凶暴性を発揮する。周囲に強いられ、ついに使徒と対決しないわけにはゆかなくなったシンジと同じに。それまで殻に閉じこもってきた分だけエネルギーは鬱屈しており、かつきちんとした発現の仕方が判らないため、破壊的な力となってしまうのだ。

ここで私は、先日の、中学生による生首事件を思い出さないわけにはゆかない。こうした劇場犯的な無差別殺人は、欧米では百年前から頻発しているが、日本では希な犯罪だった。ただし欧米のそれは、幼児性を残したまま大人になった、いわば精神的に欠陥のある‘大人’の犯罪だったが、日本で今度起きた事件は中学生のそれである。世界的に見て、‘子供’がこうした殺人を犯した例は少ないのではないだろうか。子供が凶暴な殺人を犯すというのは、ひょっとすると日本、ないしアジアに特徴的な現象となるかも知れない。

今時の中学生高校生にはみな、碇シンジ的な要素があり、日頃は従順で大人しい反面、いったん火が点くと唐突に破壊的な行動に走る。その内面を探ってみると、「嫌だ」「出来ない」「ぼくってダメなんだ」が渦を巻いている。中学生高校生(ひょっとすると大学生も)にとって「エヴァンゲリオン」が面白いのは、シンジが自分たちと同じ心理を共有していると同時に、シンジの生活が一種の理想だからだ。だってそうではないか。美しいお姉さんたちに養ってもらい、可愛い妹達に励まされ、「嫌だ」「出来ない」「ぼくってダメなんだ」と甘えていられる。お姉さんたちにはしょっちゅうバカにされたり叱られたりするが、そうやって構ってもらうのがまた嬉しい。では、ただただだらしないだけなのかと言うと、ここ一番では衝動を激発させ、猪突猛進で敵を倒す。何しろ彼こそが、エヴァンゲリオンの最も相応しい操り手なのだから。弱さと強さと、両方の特権を享受できるのだから、まさに夢のような話だ。今回の完結編を見ながら、登場人物たちが感情を激発させる度に、目がまん丸になるので笑った。日野日出志のスプラッタ・コミックスを思い出したからである。日野日出志の描くマンガはいずれも、自閉症的な子供たちの残虐な地獄夢だったが、その子供たちがみんなああいう目をしていた。

そういえば碇シンジって、頭でっかちだし小柄だし、日野日出志のキャラクターに確かに似ていないか？ そして「エヴァンゲリオン」の主人公たちはみな、多かれ少なかれ、日野日出志的な自閉症の地獄夢を共有しているのではないか。

とか何とか言いながら、シンジには苛々しつつ、苛々するから話も盛り上がるのだと、私も認めないわけにはゆかない。シリーズ前半のクライマックスであるヤシマ作戦のくだりなど、大いに興奮した。日本中の電気を一箇所に集めて、使徒に浴びせかける。この電力の集中に時間が掛かるため、チャンスは一回しかない。一気に使徒を倒すか、倒されるか……「ガンダム」のような合戦シーンの派手さでなく、戦いが始まるまでのプロセスを克明に見せることによって、サスペンスを盛り上げてゆく。格闘シーンや破壊シーンの派手さでなく、プロットと登場人物の心理描写の細やかさ、つまりディテールの積み重ねでサスペンスを盛り上げてゆくという点では、数あるロボット・アニメの中でも本作がピカイチかも知れない。先に本シリーズを「ガンダム」と「イデオン」を足して二で割ったと記したが、ディテールの積み重ねという点でもう一つ、「パトレイバー」を加えてもいいかもしれない。今改めて見直してみる、最初のエピソードにすでに、物語のその後の展開を示唆する要素がたっぷりと詰め込まれており、舌を巻く。

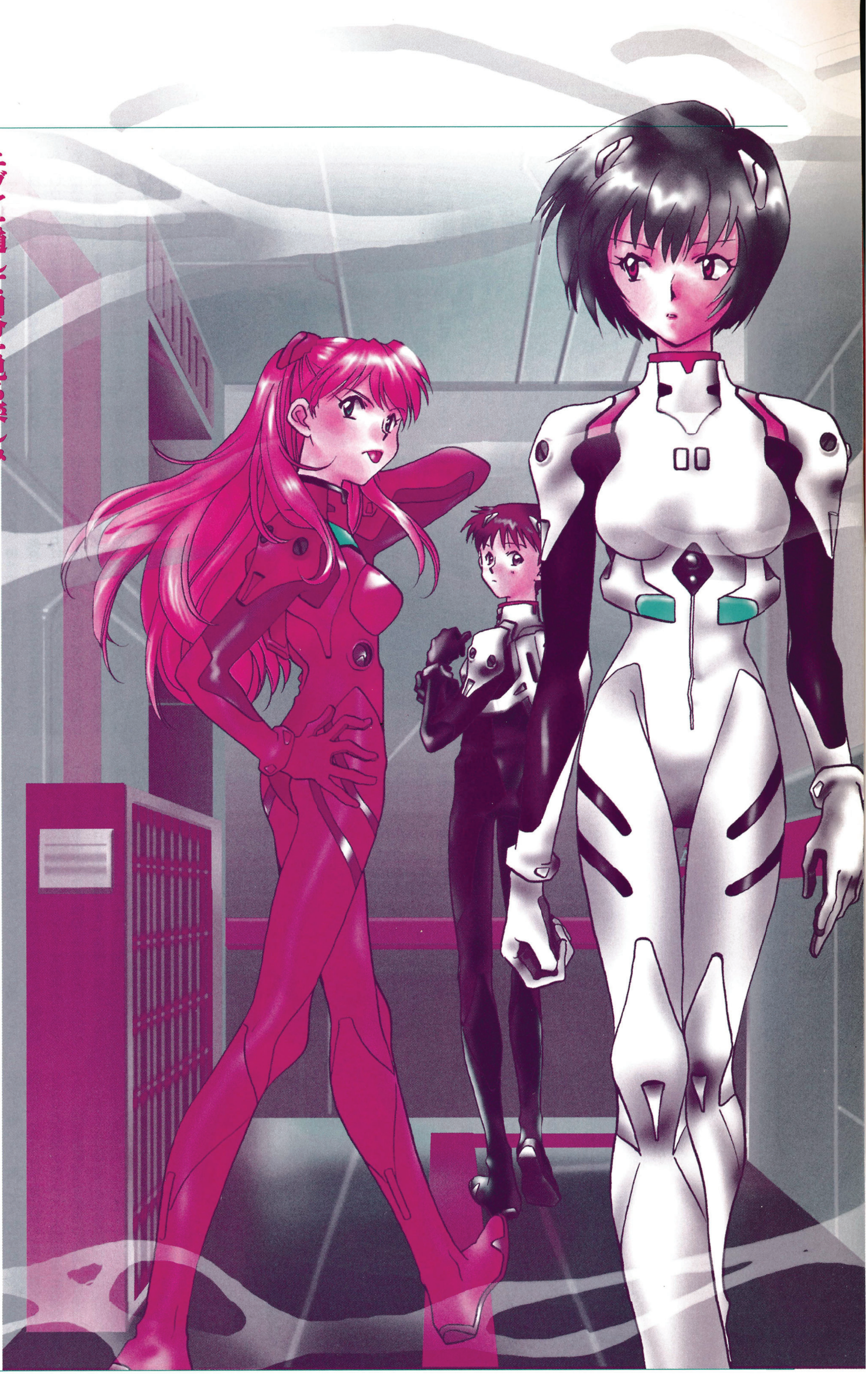
シリーズの前半では、膨大な数の登場人物を紹介しつつ、使徒との戦いのサスペンスを描いてゆくが、後半で展開が変わる。それまで外部からやって来ていた使徒が、内部に侵入してくる。使徒は、エヴァと登場人物を諸共に蝕んでゆくのである。ここからはもう、スケールの大きいスプラッタなサイコ・ホラーだ。使徒の姿は、昆虫めいていたり恐竜めいていたりロボットめいていたり、色々だ。対するエヴァは針金のように痩せこけ、背中からコードを引きずり、ヨロヨロとよろ這い歩く。ロボット・アニメというより生体メカ、いやそれ自体が進化するメカも生体も諸共に超越した連中だ。こいつらが、身体の一部をブリブリモリモリと泡立たせつつ、使徒とエヴァの境界を見失ってゆく。もう、無茶苦茶！

ゼルエルとかいう使徒との戦いのシーンなど、見ていて久々に顔がハガハガになった。戦いの最中に、エヴァは電気を失ってしまう。もう、ダメか？ しかし大和魂ではないが、気合いさえ込めれば不可能も可能になるのが日本の伝統だ。シンジの「動いて、動いて！」のがむしゃらな願いが通じて、エヴァは不意に獣のように復活する。モリモリと左腕が再生し、人間的な二足歩行を棄てて、幼児か獣のように四つん這いになる。そして、まるで号泣するような雄叫びを上げつつ、血と肉片と装甲板をまき散らしつつ、生肉をむさぼり食う。それを見ていた美しき女性隊員の一人など、おぞましさにゲロを吐いたりする。

このシリーズは、前半は善玉と悪玉のはっきりした、ハリウッド映画的に明解な作品だが、後半でこんな具合にどんどんタガが外れてゆく。一昔前に世間を騒がせたテレビドラマ「ツイン・ピークス」もそうだが、タガが外れてから俄然面白くなる。で、最新の「完結編」だが、ほとんど「2001年宇宙の旅」か「地獄の黙示録」のエンディングである。いやそれより、「ツイン・ピークス」のなかった方がいいエンディングに近いかもしれない。つまり、訳が判らないのである。繰り返すが、私はシンジの優柔不断で甘えた根性が嫌いなのだ。あの甘えん坊の内面の小宇宙など、見たくもない。嫌なものを見てしまったというのが、正直な感想だ。脱線したシリーズというのは、結末を付けようがないほど話が広がっているから面白いので、それを締めくくろうとすると、こういう苦しいことになる。しかし、正直言って……こうして原稿を書くまでは、このシリーズに私は大して興味を持っていなかった。世間が騒げば騒ぐほど、逆に白々しいものを感じていた。それが原稿を書きながら、改めてどんな作品だったか考えてゆくと……急に興味が沸いてきた。今からハマってももう遅いかもしれないが、また改めて、じっくり見直してみようかと思っている。

エヴァを通して自分を見る楽しみ

結論から言ってしまえば、「エヴァは人の心を映す鏡である」——もしくは、「エヴァについて語ることは、自分自身について語ることにほかならない」。いやもちろん、この文章の中の「エヴァ」は、「ヤマト」や「ガンダム」（ZやGやWがついても可）、「マッキントッシュ」や「京極夏彦」とさえ交換可能なのだが、「エヴァ」の場合、他の固有名詞群とくらべて格段に汎用性が高い。エヴァに託して人生を語るために、べつだんアニメおたくである必要はない。それどころか、この十年、TVアニメなんか一本も見たことがなかった人たちでさえ、憑かれたような情熱をもってエヴァを（つまり自分を）語りつづける。こうしたエヴァ言説状況は、おそらく「気持ち悪い」という言葉で形容されるものだろうし、じっさい「終わっちゃったTVアニメ」に関する言葉の洪水にうんざりして、おれ的には一時（96年5月から97年3月まで）エヴァから気持ちが引いちゃってたくらいだけど、春エヴァで吹っ切れました。「もう一度逢いたい。その気持ちはほんとうだと思うから」ってやつですか。



ボクと恐れと世界と他人と。

Fear and the World and People and Me

「エヴァンゲリオン」とは何だったのか。

What was the Phenomenon called [Evangelion]?

SF評論家
大森 望

エヴァについて語る言葉を通して語り手の心を(そして自分の心を)観察することには、それなりの楽しみを見出せないわけでもないし。

というわけで、この文章も当然、「オレのエヴァ」でしかない。「エヴァ論なんてケツの穴と同じだ。だれにでもひとつはある」とか。問題はその「オレ」が誰なのかということで、ふだんはあまり考えたくないことだけど、エヴァを語るフリをしていれば、自我を傷つけることなく考えられたりする効用もあるだろうし。アニメおたく的に言えば、「おたくである自分」と対決するかわりにエヴァと対決してたりするわけで、これはアニメ誌の投稿欄とか、インターネットのWWWページ、NIFTY-Serveのエヴァ会議室なんかでよく見かけるタイプ。エヴァについて書かれた文章を読む場合、それに共感できるかどうかは、筆者の「オレ」をどの程度共有できるかにかかっている。この文章の「オレ」が前提にしているのは、「一九六〇年生まれの活字SFおたく。男性。アニメも世間の平均以上には見ているけど、真性アニメおたくよりは全然薄い。妻あり。社会生活は一応良好」とか、そんな感じですか。

こういう人間は——あくまで一般論としてだけど——パンツ系のネタ(『パンツを脱いだ』という言葉に象徴される、監督の内面にひきつけてエヴァを語る論調)にはあまり反応しないかわり、SF的な記号には敏感に反応する。第弐拾伍話の予告編で明らかになった最終話サブタイトルの出典をたちどころに説明できたことにSFファンの誇りを久々に感じたりとかさ(笑)。

じっさい、オレのエヴァは、第一義的に現代SFの傑作なのである。……と書いたら、NIFTY-Serve某会議室で、アニメおたくのおねえちゃん(ガンダム世代)から、「SFおたくがいまさら父親面して(アニメに)すり寄ってこないでよ」と叱られたこともあったけど、GAINAX自体、SFファンダムの土壌から生まれた会社だし、関連作品がSF系イベントで上映されてきた歴史に鑑みれば、SFファンがエヴァに親近感を抱くのは無理もない。だいいち、エヴァの物語的なテーマは、人類の種としての進化(もしくは変容)という、すぐれてSF的なものではなかったか。その背景にあるのは、SFが基盤とする科学合理主義ではなく、むしろテイヤール・ド・シャルダン的な神秘主義でしょ、という反論に対しては、だってジョージ・ゼブロウスキーの『オメガ・ポイント』もSFなんだし——と再反論できるわけだが、その種の議論はSFおたく以外の読者にはほとんど関係がない。エヴァがSFかどうかって問題と、エヴァ自体の評価は別物ですからね。ま、論理に飛躍があるからSFではない(作中で説明されていない謎が多すぎる)という批判に対しては、反証として映画の「二〇〇一年宇宙の旅」を挙げるだけにとどめておこう。

SF史的に了解された「オレのエヴァ(SF篇)」を一言で要約するなら、「小松左京から出発し、サイバーパンクを経由して、ニューウェーヴで終わったSFアニメ」ということになる。

アウタースペース→サイバースペース→インナースペースの流れは、TV最終話放映直後、エヴァをなおもSFに回収するための絶望的な試み(笑)としてアクロバティックに編み出されたものなのだが、夏エヴァ(「THE END OF EVANGELION(以下略)」を指す)ラストシーンの〝終着の浜辺〟を見てしまった今は、そう的はずれでもなかった気がしている。アンチミステリがミステリ的な謎解きの絶対性を疑い、拒否したように、ニューウェーヴSFはSF的な謎解き(使徒の正体とか、補完計画の科学的裏付けとか)の絶対性を否定したわけで、ニューウェーヴ後のSFにあっては、人類の命運がひとりの少年の心の問題に委ねられたって一向にかまわないのである。

もっとも、これはSFおたくの共通見解ではない。SFおたくのエヴァ観もSFおたくの数だけ存在する。一般に、自分にとってなじみのない分野だと、特定のひとりの発言を、その分野の代表的な見解だと誤解しがちな傾向があるけれど、その種の一般化はエヴァに関するかぎりまったく通用しない。

たとえば、「エヴァってやっぱり××だよね」における××には無限のバリエーションがある。マジンガーZ、ガンダム、マクロス、ボトムズから、デビルマン、魔獣戦線、諸星大二郎、岡本喜八、はみだしっ子、中学生日記、人格改造セミナー、新興宗教……。エヴァってやっぱりSFだよね、と言ったとき、××はさらに細分化されて、『幼年期の終わり』、『ブラッド・ミュージック』、『継ぐのはだれか』……と変化していく。

人はエヴァに自分の見たいものを見る。そのことが顕著に現われたのが、夏エヴァのラストシーンだろう。オレは見たくないものを見たと思っている人も少なくないが、見たくないものを見ることも、「あなたが望んだエヴァ」なのだからしかたがない。そして、あのシーンが、観客に「見たくないものを見せる」ことを意図している(ように見える)以上、「見たくないものを見た」と思えることは、むしろ幸福なんじゃないかと思う。

その意味で、夏エヴァが「もののけ姫」と同時期に公開されたことは、皮肉な偶然というしかない。観客のおたく性をほとんど刺激しない〝映画〟である「もののけ姫」は、夏エヴァのほとんど対極に位置している。この対立の構図は、一九八四年の夏にそろって公開された「風の谷のナウシカ」と「うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー」の対立の反復だと見ることもできる。森岡浩之氏との対談(アニメージュ97年9月号)でもしゃべったことだが、夏エヴァと「うる星2」には照応する点が少なくない。「うる星2」における、〝永遠にくりかえされる学園祭前夜〟は、〝他人の恐怖〟が存在しない、居心地のいいユートピア——〝ラムの望んだ世界〟にほかならない。この世界を破壊することによって、あたるとラムは最終的に現実世界へと帰還する。しかし、帰還した現実世界とは、学園祭の朝を迎えた友引高校。おなじみのキャラクターによるドタバタがはてしなく続いていくことは(少なくともアニメファンである観客の中では)保証されている。TV版エヴァ最終話では、ありうべきもうひとつの世界としての「学園エヴァンゲリオン」(トーストくわえて走ってくレイちゃん)が観客に安心感を与えた。しかし、夏エヴァでは、ATフィールドを復活させ、現実逃避の道は完全にふさがれている。現実世界に帰還したにもかかわらず、アスカの首を絞めるシンジ。アスカが吐き捨てるように口にする最後のセリフ。学園ゲリオン的な居心地のいい世界への幻想は完璧に打ち砕かれ、その瞬間に劇場の客電が点灯する。エンドクレジットを25話と26話の中間に持ってくることで、映画は観客が余韻に浸ることを許さない。「気持ち悪い」のセリフと同時に、観客は劇場の外の現実世界へと放り出されることになる。

問答無用のこの結末は、映画冒頭のファニッシュな遊び(関係各社のクレジットタイトルの連続)とみごとな対照を見せる。エヴァがおたく的な快感に対する愛着と憎悪のあいだで引き裂かれつづけていたアニメだったことを考えれば、このコントラストは象徴的だ。

おたく的なジャンルの作品は、必然的に、ある種自己言及的な構造を持つ。先行作品の記憶をひきずる宿命にある以上、それは当然のことだろう。エヴァはそうしたおたく性を徹底的に突きつめることで、おたく文化の閉鎖性を突き抜け、高い一般性を獲得した。

「もののけ姫」に対する夏エヴァの圧倒的な勝利(ってもちろん興行収入のことじゃないよ)は、おたく文化の成熟を告げる勝利だ。それは幼形成熟にすぎないという批判はもちろん正論だが、大人になるってことがおたくじゃなくなることを意味するのなら、べつに大人になんかなりたくない。〝おたくであることの恍惚と不安〟を描き出したエヴァは、監督の好むと好まざるとにかかわらず、20世紀おたく文化の金字塔なのである——っていうのが、「オレのエヴァ(おたく篇)」でした。なお、夏エヴァが嫌いだった人は、「鋼鉄のガールフレンド」で補完すると吉。

エヴァンゲリオンとは何だったのか

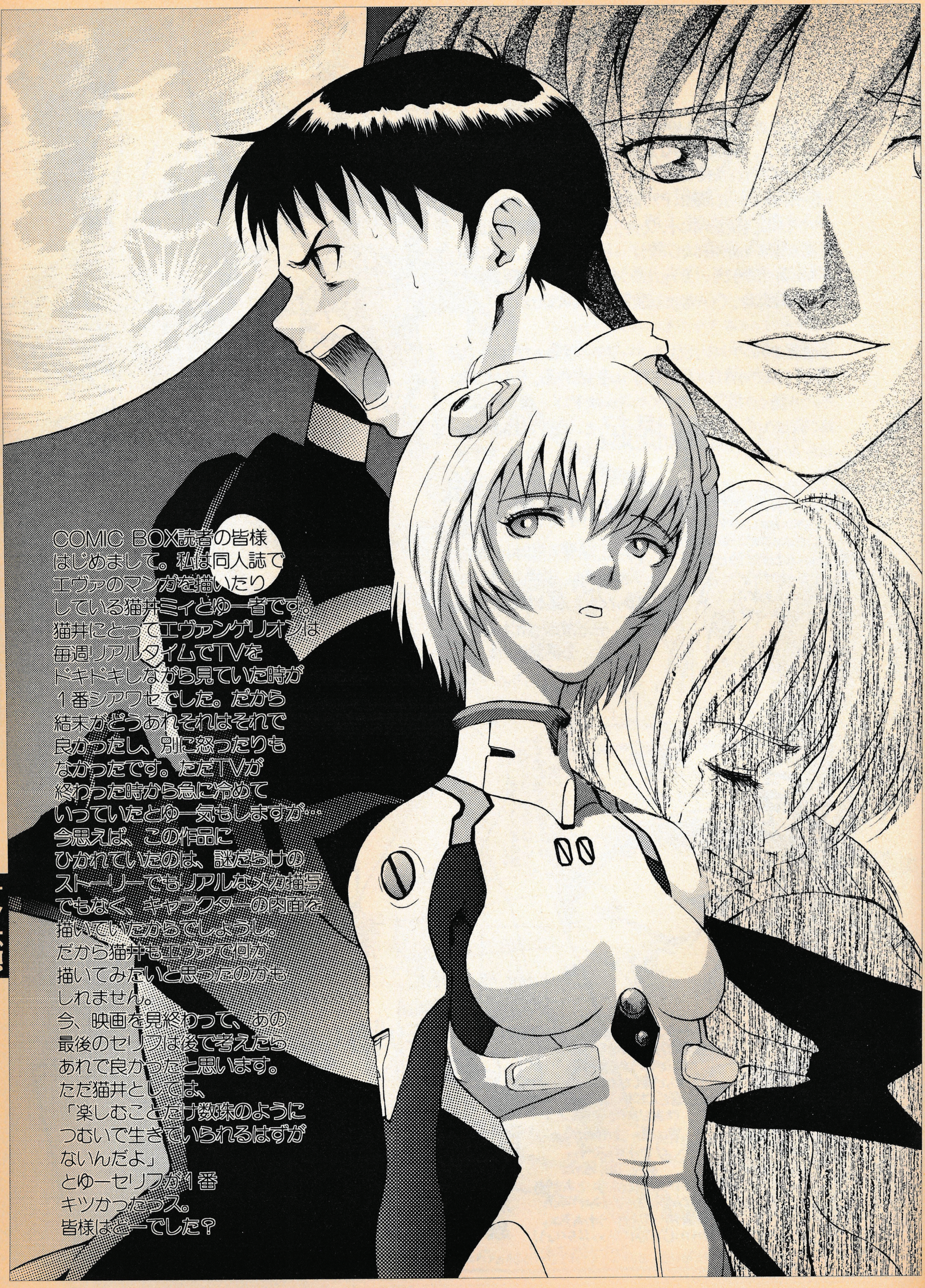
同人作家作品集

子供たちは今でも悩み、愛し、生きつづける
僕たちの描く、もう一つのエヴァ



武川あお

猫井ミィ


COMIC BOX読者の皆様
はじめまして。私は同人誌で
エヴァのマンガを描いたり
している猫井ミィとゆー者です。
猫井にとってエヴァンゲリオンは
毎週リアルタイムでTVを
ドキドキしながら見ていた時が
１番シアワセでした。だから
結末がどうあれそれはそれで
良かったし、別に怒ったりも
なかったです。ただTVが
終わった時から急に冷めて
いっていたとゆー気もしますが…
今思えば、この作品に
ひかれていたのは、謎だらけの
ストーリーでもリアルなメカ描写
でもなく、キャラクターの内面を
描いていたからでしょうし。
だから猫井もエヴァで何か
描いてみたいと思ったのかも
しれません。
今、映画を見終わって、あの
最後のセリフは後で考えたら
あれで良かったと思います。
ただ猫井としては、
「楽しむことだけ数珠のように
つむいで生きていられるはずが
ないんだよ」
とゆーセリフが1番
キツかったっス。
皆様はどーでした？



「THE END OF EVANGELION」を観終えて家に帰ると、妙にHIGHになってました。あの直接的な流血やLCLに還ってゆく人々の様がここまで行くと気持ちよかったというか。(もうち歳若い頃だとどろどろに感情移入しちゃって周囲にアタリ散らしてたろうけど。)カタルシス、というヤツですかね。なんだかホント、スッキリしてます。(笑)第弐拾伍話、最終話の"呆然"も解消したし(笑)。——もしかしたらこの1年のインターバルがあったからこそ、「エヴァ」という作品を冷静に観賞できたのかもしれませんね。(いや別に、鑑賞でもいいんだけど(笑))

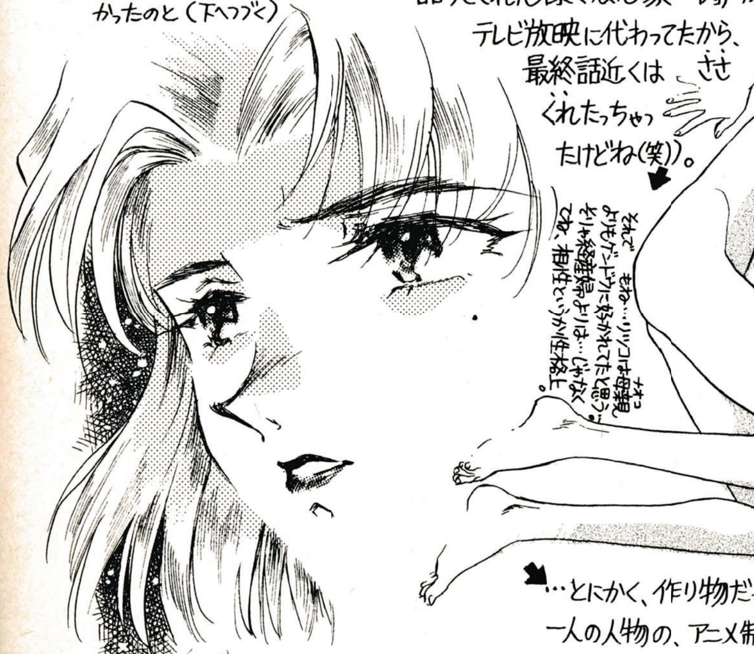
映画館でとなりに座ってた小学生ら(♀)は、登場する度「カヲル君…」と口にしながら(注)バカにするよーに…。笑っていた。ナゼ!? カヲルが何をした——っ

「新世紀エヴァンゲリオン」とは?——スタッフ全員のエネルギーと技術で、ここまでの存在の大きさを持つに至った作品。今までにないキャラや諸々の描写をとにかくやっちゃったアニメ。誰かがどことなく欲していた**問題提起**と、納得できるまでの道のりの連れあい。…そして、庵野秀明氏の、作り手としての**独特の叫び声**(感情をキャラクターに、語彙を肢体に、ボディランゲージを動画に、表情を演出に代えて語ってくれた様々な心象…肉声がテレビ放映に代わってたから、最終話近くはささくれたっちゃってたけどね(笑))。

エヴァシリーズと戦ってたアスカの髪の動きがすげかっこよかった。♡

ラストシーンの包帯姿のアスカは"つなぎ直された人形"みたいで何となく怖かった…。

実にあっけなく、決して格好良くなく、裏切られ捨てられて、ミサトの正反対ともいえる死に方をしたリツコ。ファンだったのになぜこうも立腹せず受け入れられたのだろうとフシギに思っていたのだけど。彼女らしいといえばらしかったのと(下へつづく)



それでもね…リツコは母親(ナオコ)よりもゲンドウに好かれてたと思う。そりゃ経産婦よりは…じゃなくてね、相性というか性格上。

ゲンドウの意に添わなくなったレイにはこっちまでおどろいたが、ゲンドウのレイを呼び戻そうとする情けない声がステキ♡

見事なまでにシンジの父ちゃん版だったがゲンドウの父親も傷つける(傷つく)よりは関わらない方を選ぶ人だったのか?最期も不器用な人だった…でも憎めない人だった。

今回の歌もピカイチだった!「THANATOS」も「Komm, süsser Tod」も現在カンペキにマイブームです。リピートしまくり。



…とにかく、作り物だった。一人の人物の、アニメ制作者の皆さんの。でも、**作り物として本物**だった!とは感じています。ああ…

面白かった!!

本当に有難うございました。次回作(実写もいいけどアニメも。)も是非観せて下さいね。

印刷物にはどこまで描いて許されるのやら。でも吐き出さずにはいられなくて。原始的な信仰の偶像に匹敵するインパクト。次カットのしらすのよーなアヤナミはやはり精子のイメージだったのか…? なんかカッコイイでした。



(上から)このマヤちゃんの最期(?)があったからではないでしょうか(愛情をもって接してくれる人が居たんだね、と。秘めてたあたりが切ないが)…。実は唯一泣けたのがこのカットなんですっっ まるで道に迷った仔犬が来てくれないとあきらめてた飼い主に抱きあげられたよーな表情(かお)と声!うわあぁぁっ、かわいいじゃないかっっ!!ちくしょう!ミーハーしちゃったよっ!!

NAOKO.H ひうがなほこ
samedi 2 juillet, 1997


赤木リツコ
「あなたが欲しい」
「あなたが嫌なの」
"I need you"で泣きました。
伊吹マヤ
脇役担当の(笑)米倉けんごです。
どんなアニメやまんがにもサブキャラってものが居て、どんなに扱いが小さかろうとキャラクターがいる限りそのファンって存在すると思うのです。そんなファンに対してのあからさまなコビが無いトコロ… ツレないぜガイナックス!! そこがまたエヴァという作品のクールでかっこいい所でもあるのですが。「エヴァに脇役はいない!」って説もあるけどね。とりあえず、脇役マニアのタワゴトってことで。
1997.AUG.米倉けんご
青葉シゲル
好きなん、いないのかな…。
子安さん、サイコー。
日向マコト
現実にいたら、ホレるな。絶対。
相田ケンスケ
なんてクールな14才…。
でもジレンマが切ない。
友情と欲望、さいごはどっちをとったの?
ふくらはぎ〜
洞木ヒカリ
エヴァの作中、
いちばん強い子だと思います。
加持リョウジ
SO, COOOOOOL!!
鈴原トウジ
個人的に、いちばんすきなキャラです。
理由は長くなるので言えない(笑)。
JAF.CONで、とあるディーラーさんがスゴイ出来のイイプラグスーツのトウジのフィギア出してました。
愛。
完結編については、切なくて愛しくて、何も言えません。エヴァの時代に生まれてきてよかった。ありがとう ガイナックス。

米倉けんご

エヴァンゲリオンとは何だったのか？

by YOU.NANAGAMI

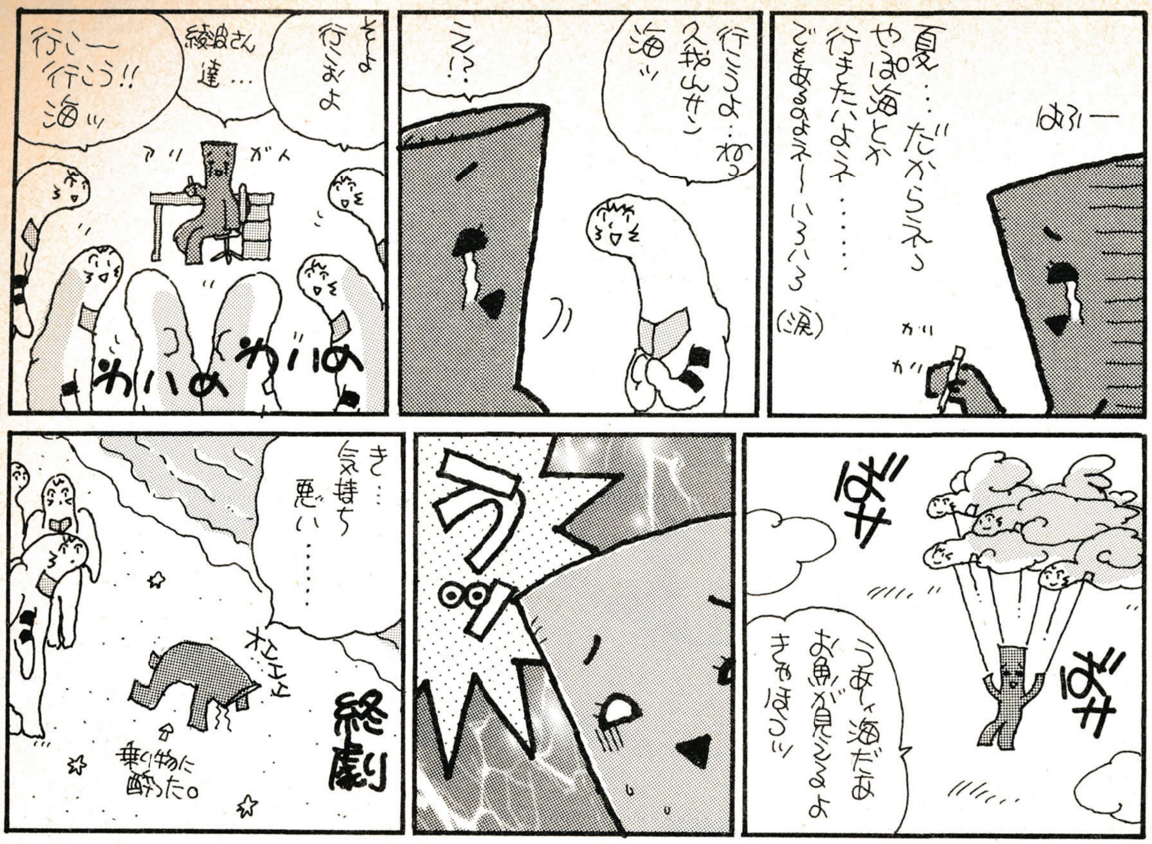
映画見た！すごかった 嬉しかった、カッコ良かった、悲しかった、感動した、驚いた、だけどあの完結のしかたにはすげ〜不満が残った。これが結末かと思うと茫然自失になった。 友人達の意見は、良かった、わからん、あれでいいんだよと千差万別だった。 シンジの人類補完計画は終ったのかもしれない。だけどオレの補完はされずじまいのまま終劇をむかえたエヴァンゲリオン
1年半前エヴァンゲリオンが水曜の6時半テレビ東京系で始まって以来ずーとオレの心の中はエヴァンゲリオンでいっぱいだった。アニメファンはオタクと言う時期にもかかわらず、そんなささいな事気にもならなくなるような作品だった。アニメーションという日本の生み出した文化のすばらしさをわかるやつだけわかればいいと思っていたのだが、その根根をみごとにぶち壊してくれたのが宮崎アニメとエヴァンゲリオンだった。気付いた時にはエヴァンゲリオンは社会現象とまで言われるようになっていたが、リアルタイムで見ていた友人と人類補完計画とは、アダムは、どこにあるの、ゼーレとは何者なのか、などTELや深夜のファミレスでよくあれこれ言い合った。周囲の人に聞こえたのかもしれないだけどそれでも良かった。どうせ周囲の人とは二度と会わないのだから。だいたいそんな事気にする人たちがアニメファンは暗いとかイメージを作っているのを知っていたから、だけど絵をかける人やエヴァンゲリオンについてすげ〜くわしい人にかぎって人前でエヴァを語るのを恥かしがった。むしろ普通の人のほうが、つまり全然アニメに興味が無かったという人が話しかけてくれると嬉しかった、楽しかった、そして白熱した。自分の考えを述べ他人の意見を聞くディスカッションがこんなに楽しかったのは生まれて初めての経験だった。TV番25.26話については、とにかく色々な意見があった。だけどオレはあれはあれで良かったと思っている。シンジの空想といえども、あの学校のシーンはこんな世界になりえるかもしれないという明るい未来がそこにあったから。納得していた。だけど世間はほっとかなかった。結果映画化 TV番でそれなりに納得してたから、またエヴァが見れるラッキーとしか思わなかったのを覚えているが、オレの気持ちとは裏腹に周囲のブームはますます加熱してゆき、テレビやラジオとくにラジオで飛びかうエヴァ論争同じくして書店ではエヴァ関係の本が次々増えていき、それらのきっかけを足がかりにしてエヴァのイメージはどんどんふくらんでいった。そのイメージを他者と語り合うとこれがまたみごとに意見が食い違う。しかもそれらの意見がみんな正解のような気がした。それほどエヴァは不可解すぎた。そうゆう事も人気の一つだったかもしれない。だけどオレにとって一番印象に残ったのは、人の「死」というイメージをふくらませてくれた作品だったという事だろう。 親友の殺害 自殺 絞殺 そして無差別に殺されていく人々



普通の人は「死」という言葉を意識しても死に達する事は無い とくにアニメーションというのは子供のためのものという考えもあってか、キャラクター達が前向きな性格になっているがエヴァンゲリオンは違った。みんな後ろ向きだった。だから「死」という雰囲気が常に漂っていた。 ああもももろくあっけないほどに人という生き物は死ぬのか、日常平穏に生きてきたオレにとってあらためて気付かされた事だった。
それと同時に戦自が次々と人を殺していく姿に人間と言うのはああも残酷になれるものかというのをまざまざと見せつけられた気がした。
「THE END OF EVANGELION」の超高密度な情報量はすごい。映像的にも一部を除けば文句のつけようが無かった。だけどハッピーエンドかアンハッピーエンドかと言われればアンハッピーに見えた。物語の終りには続きがある視聴者の想像して作る続きが。だがそれが無かったいや出来なかった、最悪な状況ばかり想像しちゃいそうで、だから止めた想像する事を。
1997.7.17 有楽町のよみうりホールの試写会にて終劇の文字を見た直後の、あの会場中のどよめきは今も忘れられない。はたしてあのどよめきは、満足したものなのか。はたまた不満だったのだろうか 今だにわからない。
とにかく、白熱したし、楽しくて、さまざまなメディアにふりまわされおどらされた1年半だった。 今後も書店に行けばエヴァ関連の本は出てくるだろう。そしてまたおどらされるかもしれない。だけどひとまずオレのエヴァブームは終った。
正直、社会現象に便乗しただけかもしれない周囲のさわぎの過中に加わりたかったかもしれない、でもそれでも良かった楽しかったから。最後に…
ありがとう、庵野秀明総監督。

七神屋

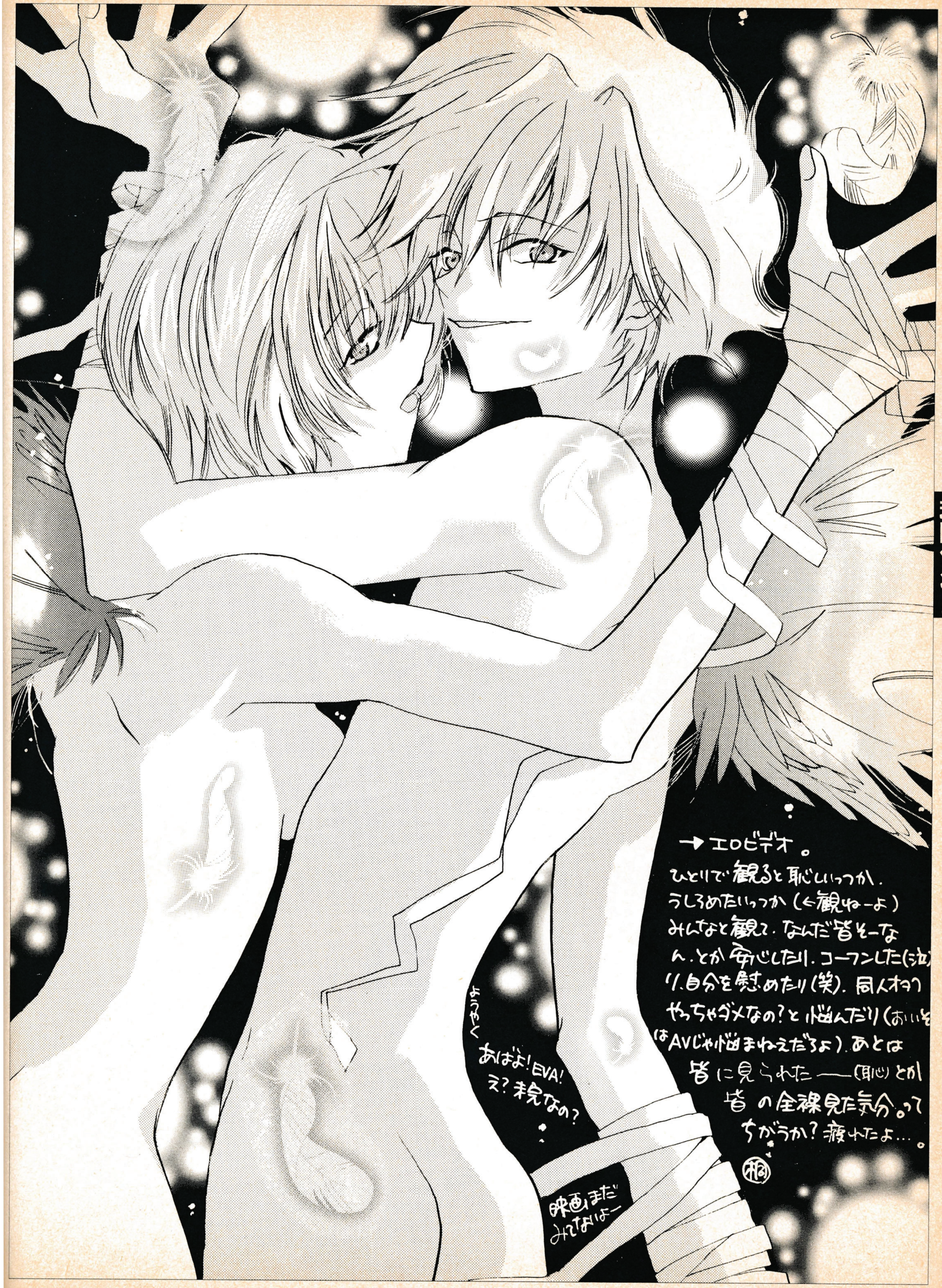
久我山リカコ



終劇という名の襲撃



作品世界とは少しかけ離れた視点での話になりますが、やはりTVシリーズ#25・#26を私的レベルでは認めたくないのです。夏の劇場版でリメークされた#25・#26を観たわけですが、これがTVシリーズの作品だったら…。新しい才能の出現に驚愕したことでしょうね、素直に。
TVシリーズの大変さといったらそれはもう想像を絶する作業だと思いますよ（トシをとってからはやるモンじゃない…某ベテラン演出家談）。皆、悶き苦しみながら誰も見たこともない映像をめざして、たま〜に神様なんかも降りて来たりしつつ（笑）創り生み出されるのでしょう。そしてそれは時間的な戦いでもあり、予算との戦いでもある。それがプロの仕事だと考えています。そういった面からいえばあの２本はプロレベルの仕事であったとは思えない。AR台本を写し出すこと、レイアウト予告をするのは前衛的な演出なのでしょうか…なんか違う。劇場版はファンの望んだ意思で実現となったのかもしれませんが、TVシリーズのフォローがなされていたとすれば、まるで週刊連載で描ききれずに悔やまれていたところを単行本の直しでフォローする漫画家と同じかも…（涙）。（けっして悪いという事ではナイのですよ）ただTVは個人の作品ではないので…。時間と戦いきってほしかったですね、プロとして。
劇場版できちんと答えは見つかりましたし、私なりに納得できるカタチで終われて満足しています。ところで私はエヴァ量産機綾波バージョンにかなり激ラヴなのです〜〜♡


→エロビデオ。
ひとりで観ると恥しいっつか.
うしろめたいっつか（←観ねーよ）
みんなと観て.なんだ皆そーなん.とか安心したり.コーフンした(泣)り.自分を慰めたり(笑).同人オタつやっちゃダメなの?と悩んだり（おいそはAVじゃ悩まねえだろよ）.あとは
皆に見られた——(恥心)とか
皆の全裸見た気分。って
ちがうか?疲れたよ…。
ようやく
あばよ!EVA!
え?未完なの?
映画まだ
みてないよー

桐生チカコ

船堀斉晃


ポロッ。
極めつけ
綾波コロニー落とし！
※パロディで
同じ様なシーン
描いたなぁ…
ハァ ハァ
最低だ…
気持ち悪い…
うぇ〜
って思った↓
弐号機にも
口があった
…とゆう事は
やはりFが出来る
ちなみに
こんなシーン
でも一番は
レイ女性上位かな
本物でアレ
やられちゃぁ
エロパロに
なんないっスよ
このシーン やそつにはなれないんだわ…

エヴァは私にとって何だったのか…うむ。過ぎ去った青春といった所でありましょうか。

エヴァンゲリオンTV放送時における私自身の大ブレイクはまるで熱病がごとく、半年あまりで10冊近くの本（同人誌）を発行し、描き上げた原稿は150枚をかるく越え、月刊ダイモーンどころか隔週ダイモーンの勢いをほしいままにしました。毎週毎週TVの前で大サワギ。今考えるといい年して何ごとかというありさまでした。本トによう。

が、その熱病も、25・26話の時点でトードツに終りました。青春の終りはトツゼンたってギャグじゃなく。まさに青い春！ウルトラブルーな世界に入り込み、アッカツするのに数ケ月を要しました。そんなワケで劇場版はいずれも見ておりません。新しい映像とかTVで流れると心、躍り、昔の情熱がムズムズと心をシゲキするのですが、流れてくる噂は私の古傷をえぐるようなことばかり。もうふれないほうがいいのかな、と思ってます、私にとっては。

思いっきり熱くもえ！急速瞬間冷凍されてしまった私のエヴァへの思いは今は解凍されましたがその結果、まるで他人ごとのように考えるようになりました。今ではいい思い出です。なんだか今でも世間はブレイクしてますが、私にとってはもう過ぎ去ってしまった青春です。私なりにものすごくまじめにみて、考えて、まじめにおちこんだ作品はエヴァが最初で最後かもしれません。偉大な作品でした。あらゆる意味で。
でももうすべてが過去形なのでした。

エヴァのキャラを描くのは機会がなければもうこれが最後になるだろうから、大スキなレイちゃん2番目。アスカも好きだった。久し振りに描いたので変だね！ごめんね。
なんか我ながら暗いトークで申し訳ないです。エヴァに関することになるとどうしてもブルーが入る！でもいいくぎりになりました。C.BOX様にカンシャ！

1997.8.8.　ダイモーン天女 as よねやませつこ。

余談ですが某誌でオリジナルまんが描いたので良ければ見てくださいね！発売中のハズでーす。



「終劇」の文字を見てアングリ口開けてた人たちがかなりいたと思う。オレはその日はデートで一番後ろの席で見てたのだが、硬直してるみなさんを見て二人で失笑してしまった。途端に二人の心の壁は溶け合い…ま、そんなことはどうでもいいのだが、それだけで救われた気分になったモンです。

そういう人達は（オレも含めて）、エンターテイメントの部分で期待していた人が多いと思う。弐号機対ウナギイヌ～ズの戦いも最初はどうなるんだと思ってハラハラして観てたけど、はいそうですか、やられちゃいましたかで終わりだったね。もうひとヒネリくらいあるのかと思ってたけど。

他のところは補完計画も含めて、ほぼ同人でも再三予想されていた結果を観せられたワケで、オレはまさにアスカがどうなるか、シンジはアスカをどうするのかくらいしか予測不可能な部分が残されてなかったのよ。

狂気を描いたにしちゃぁ出来損ないだね。ま、オレには出来ませんがね…あれだけのモノ作るのは。

オレ、基本的なとこがわかってないのかもしれないけどホント、ゼーレってなんだったの？　なんのために使徒とエバを戦わせる必要があったの？初号機とウナギイヌ以外はどうでもよかったわけ？　初号機がS^2機関取り込んだ時はあんなにびびってたのになんでソレ搭載のを9体も作れるわけ？ねえねえ。

要するにゼーレがあの「新世紀エバゲ」の話を作ってたってことかねぇ…

……（以下妄想）。

「オレら、ゼーレッス。人類補完計画というのをやりたいンス。でもそれだけじゃ、オレらいつも座ってたりモノリスだったりで面白くないから、なんかロボットアニメでも挟んで間をもたそうと思ったンスよ。ツジツマなんてどうでもいいッス。なんかナゾいっぱい出してオタクなバカチンを引っ張れりゃ。あ、でもここだけの話、補完計画ってオレらも知らんかったり（笑）。

まぁ何も思いつかなきゃそのへんの同人誌見ればいくらでもネタ載ってるしね。映画はみなさんの予想通りの展開でいこうと思うンス。大丈夫大丈夫、あとは適当な精神的な描写突っ込んでおけば、みんなありがたがって観てくれるしね（爆）。……あー　いいこと思いついたぞ。みんな一つになるシーンじゃ、みんなのところにレイちゃんがやってきてパシャッってな具合にLCLになっちゃうンだ。うん、これはかなりイケてるね（核爆）。メモメモ

…………………」

というわけで、全然オモロなかったエンターティメント部分もどうでもよくなってきたので、テーマらしいとこなんですが…。

実はオレにはさっぱりでして。いや、オレなりに思ったことはあるけどね、そりゃ。でも何を言いたいのかはさっぱり。どうでもいいんだけど。

で、オレが思ったこと。最後の最後のシーン以外は、テレビの最終2話の焼き直しだったみたいなので、ズバリテーマは「自己の確立」おしまい。最後はちょっとよかったけどね。観た直後は全然感想をもてなかったが。あれって結局人類の形で残ったのはシンジとアスカだけだよね？　違うの？

アスカだけが残ったというバッドエンドがすばらしかったです。シンジが望んだことなんだけどさ。みんなが自分を許容してくれる中、アスカだけが拒絶した。シンちゃんは自分以外の他人を残す時に、強烈な他人であるアスカを選んでいた。

自分に、他人との関係の自覚を強いた成長とも言えるし、その逆ともとれる。マゾ的にね。自分からは何もできないからイジメられて、自分がリアクションを起こすのに期待してる。そのへんは…オレ自身に重ねて見てるフシがあるが、それはさておき。

まぁそれを無意識にやってしまった。気がつくと、みんなが受け入れてくれた世界はなくなっていて隣にはアスカしかいない。悪夢のような現実。首もシメたくなりますわな。

最後のアスカのセリフ「キモチワルイ」。これはシンジにとっては救いの言葉なのかもね。それが現実さ。見渡せば悪夢のよな世界に、たったひとつの実感できる現実。

今までの世界では一体どれがリアルなのか彼にはわからなかった。最後のあの世界は、彼がわかりやすいリアルをひとつだけ選んだ結果だったように思う。

と、いうわけで、もしあの作品に現代社会に向けたテーマがもしあるとするならば（マジか）。

『溢れかえったモノや情報や価値観、つまり自分以外のモノの中からたったひとつでも何か実感できる何かを見つけること、それがつまり自分を知る方法でもあるのだからがんばりなさいよ』…みたいなコトじゃないんでしょうかねぇ……。えんがちょ。

For AOI

TAGRO




Q・あなたにとってエヴァンゲリオンとはなんですか？
あーーーーん
希有馬（けうま）
エヴァンゲリオンだぁっ？
あんなでっち上げのプロット
見せかけの設定とハッタリの
内容のない台詞の繰り返しに
毎回その場限りの出鱈目な演
破綻まみれの繕いストーリー
監督の独り言と自己暴露と
我がままと独断と偏見足して
自分がただのオタ
オタクを啓蒙し
理解もされず完
実は裸踊りです オ●コーシ
本音しかない個人的な作品で
自己満足の為にファンを裏切
やれるくせにエンタメに徹せ
結局最後はメタフィクション
少ない予算に苦しんだあげく
他人のお金儲けの道具にされ
嘘がつけずそのことを作品で
でもソコが大好きだぁ
もー好きで好きで
本業ほっといて100Pもある同人つくっちゃうし、
絵柄はかわっちゃうし、
庵野カントクにムリヤリ会いにいっちゃうし、
庵野カントク用のエロ同人はつくるし
悪口言うヤツにケンカふっかけるし
未だ冷静になれないし
うあさああああ
マーわけでエンドオブエヴァが
『わかんない』とゆう人は脳の少ない人と断定しますし、
『つまんない』とゆう人はボクが殴りにいきます
マジで



私を見て――!!
私達にとってのＥＶＡとは…「血の通ったキャラクター」による、「胸かき乱される物語」にあったはずなのですが…
キャラクターが「つくられたもの」である事をやめて「作者の分身」になっていくにつれて、人間的に魅力の無い存在になっていったのは…何故？
だから、その前に　お前が
他人を見てやれよ
他人に優しくしてやれよ
僕に優しくしてよ――!!
あの映画の感想としては…嫌いな人間の内面を、いくら「まごころ」込めて正直に描かれても、嫌いの再確認をするだけで、好きにはなってはあげられないんだなっていうことでした…。
庵野氏は、自分を正直に描くことがオタクというものを描くことだと思っていたようですが……違うよ、それ。あの人、特別に気持ち悪いもん。　by GRAN
ホントはこんなカオ描きたくなかったけど…そこをあえて私の大嫌いな映画版のカオで描いてみました。
やっぱり何か違うよ…アスカを描いてる気がしない…。　ｂｙ　桜月りん

桜月りん＆GRAN



7月18日
公開前日の
レイトショーで
初めて完結編を
見た
見終わつた後の
客の反応も
おもしろかつた
ま、こんな
もんでしょ
知ったかぶりマニア
謎はどない
なっとんねや
謎とき期待派
感動で
前が見えない
なぜかタオルを持ってくる奴
(本当にいたらしい)
俺はと言うと
春の映画で引いて
しまつたせいもあり
かえつて楽しんで
見れた。よかつた。
しかし、謎や展開は
どうとでも取れる
ような曖昧さで
満たされており、
シーンの分析には
ほとんど意味がない
ような気がする。そう、
この映画はかなりエヴァブームそのものを
意識して作られており、作品としてだけで
なく、エヴァブームにもピリオドを打とうと
しているのではないかな。
スタッフの熱意ぎりぎりの「枯れた」感じが
伝わつてくるのはそのせいだろうか。
やつぱりあの人は凄い人でした。だから、
さよならもありがとうも言わないぜ。
俺は大都
97.8.7 天真楼

気持ちのいいこと、悪いこと、**私にとってのエヴァンゲリオン**

エヴァンゲリオン完結編を初日に観た。
ＴＶの２５話、２６話というスタイルでまとめられ、本来の在るべきエヴァンゲリオンとして納得のいく完結であり、世間で言われているよりは、素直な作品だった。今は、このアニメーションに出会えた喜びをかみしめている。私は、この作品を産み出した人々が私と同世代である事を誇りに思う。
観客の多くは呆然としていたようだった。映画が終わった瞬間にあれほど静まりかえっているのを始めてみた。映画のラストの「気持ち悪い」というアスカの言葉は「私は生きている」という事のように思われる。アスカにとっての勝利宣言で、少なくともハッピーエンドである事は確かだ。これは決して皮肉ではない。最後のシーンが、もし、シンジとアスカが手を取り合って空を見つめるという最後だったらどうだろう？それこそ気持ち悪いではないか。首を絞められてもなお、アスカはシンジに手を伸ばしている。あれはシンジを慰める行動のようにも見えた。アスカはシンジを心底憎んでいる訳ではない。シンジが自分を傷つける行動にでても、それを容認するくらいの度量がアスカにはあるのではないかと思う。シンジの母親であるユイも、単にシンジの母親であるのに留まらず、人類を見守る存在になった。私はこの部分が一番好きだ。結局、ゲンドウもシンジも、女性の偉大さの前にはかすんでしまったというのが最終的な感想である。しかし、このような肯定的な見方ばかりではないようだ。
晶文社からでている「未来映画術２００１年宇宙の旅」という本を最近読んだ。これは9歳で始めて２００１を観た著者が、大人になってからまとめた研究書だが、紹介されている２００１公開の状況がなんとエヴァに似ている事か！「矛盾だらけの２００１は、どうにもつじつまの合わせようのない映画だった。説明の欠如にもとまどった。そして理解できないものはこきおろすしかない」「ファンは長い列をものともせずに週に三度、四度と通いつめた」「完全にひとりよがり、ディティールにこだわりすぎ」「訳がわからない」しかし、その後の２００１に対する評価がどうなったかは御存じの通りである。
現在、エヴァに対しても賞賛と共に罵倒が投げ付けられている。「ストーリー構築を放棄した終わり方」「プロ失格」「思い付きのストーリー構成」「最初から“本来のシナリオ”などはなかった」「庵野はクズ」等々。
ＴＶ版は、スケジュール的に破綻したのは明らかだった。しかし、それはシリーズ前半の緻密さから判るように、その場で全力投球する姿勢がもたらしたものだ。時間配分ができないのは、確かにプロ失格と言えるかもしれない、しかし、一視聴者の立場から見れば別に損をした訳ではない。凡庸な作品をつくるプロより、私にとってはこちらの方が望ましい。むしろ、それができないところに、ガイナックスの、庵野秀明の真骨頂があるのではないか。単なる思い付きだけで、あのような作品ができる訳がない。
エヴァンゲリオンには気持ちのいい部分と悪い部分がある。優れた作品が大抵そうであるように。

（ブラックストーン　軍事史通信ＨＡＲＵＮＡシスオペ）



直接は関係ないんですが…。
でもね、『作品を見る』っていうのは
仮に自分の好きなパート「キャラ」・
「メカ」・「声」・「らしい設定及び組織」・
『うんちく』・「私だけが知っている
パロの発見」――などに力が
入いっていなくても逆に自分の好きな
パートの描写がなかったとしても、
総合的に客観的に良し悪し、
おもしろいや否やを判断する…
という事だと思うんですけど。
…そこが最近ちょっと…。

…つくづく思うのは…いつの間にか低い所で固定されかけていた様々な意味での一般社会でのアニメなどの作品・作り手のポジションをもう一度考え直させる為の…『結果として』環境整備に有効だった。そんな気がします。深くは言いませんが、良くも悪くもいくつかの前例のない事があった割りに、それがある程度許されたのは、やはり商業的に『受ける』物を作り発言権が強まったからでしょう。そしてその流れとして生じる一般社会・アニメ界などとのアプローチの違いがあればこそ今まで表に出ず考えなかったことが見えたような気がします。(作品の内容のことではなくて)
将来のアニメ界などを考える時、この状況が作り手・受け手に色々と考えさせ、そして何らかの行動のきっかけになれば……と思います。

しかしあれですよね。こーゆー『状況』を作れる作品を、作れる立場を自らの力で作れる――というのがすごいんでしょうね。基本的に僕は『何かをやってるなぁ』もしくは『やろうとしてるなぁ』という人達が好きです。にくみながらも。


映画観ました…2時間睡眠で初日の朝イチそして立見でっ(笑)観終わってボーーッっとしながら映画館を出てボーーッっとしながら買い物して1時間近く過ぎた頃やはりまだボーッっとしつつも"でも…あれで良かったんだわっっとようやく思考力が復活したけどその後2日近く無気力状態が続きました。ショックでっ
でもっ!あれで良かったんですっ
春の映画の続きがイキナリさわやかなラストを迎えていたら嘘くさい気がしてしまうので…
私にとってはあのラストはハッピーエンドに入るんですっ
きむる/ピリカ
エヴァは
TV版も映画版も
私にとって
とてもとても
痛いアニメ
きむる



ふじさわたつろー



●エヴァンゲリオンとは、私達(怪獣薬局)にとって何であったか、といえば 楽しいお祭りでした。インナーアスレチックでした。エヴァを観ながらいろんな謎解きに頭を使ったり、ありがとうって泣きたいほどに思う、また頭に来る自分の気持ちを覗き込んだりすることがとても楽しかった。私たちにとってパーツ自体に新しいものがあったのかといえば、それはあまり無かったと思うのです。でもこれとこれを和えてこうして出して来るかー、という料理の妙、手堅さに毎週感動し本当に楽しみにしていた前半でした。そして胸に痛い場面を、社会的にヤバイ場面をも描くことによって、確信を持って見ている者に正面から「大丈夫なんだよ」って言葉を届けるつもりなんだ？と思った。そうならいいなと思った。失速せずお願いだからゴールまで駆け抜けてくれと毎週毎週本当に祈って観ていた冬から春でした。“伝えたい”という強い強い気持ちによってこの物語は支えられていると思っていたのですが、それは実際そうだったのかそうではなかったのか、判りません。(でもそれは論じたりすることではなく胸のうちに置いておきたいことだと思ったりするのです。)

●肉体的にどうなろうともシンジ、アスカ、綾波、それぞれの魂が報われる、そういう着地点が来ればいいなと思いつつ、ずっと終わりを待っていました。ストレートに「好き！」と言うには余りにも複雑な気持ち過ぎる、でも私たちは彼等がどうなってもいいとは決して思えなかった。そんなエヴァンゲリオンでした。

『終劇』してよかった。ありがとう。スタッフの皆様お疲れ様でした、と心から言いたいです。

／怪獣薬局

エデンの東とアダムとイブと

かくしなのぞみ

あの衝撃のラスト十秒間では物足りなかったのでこんなん描いてみました。二人が幸せにやってるといいなあ…



ずっとやってろ痴話ゲンカ（笑）

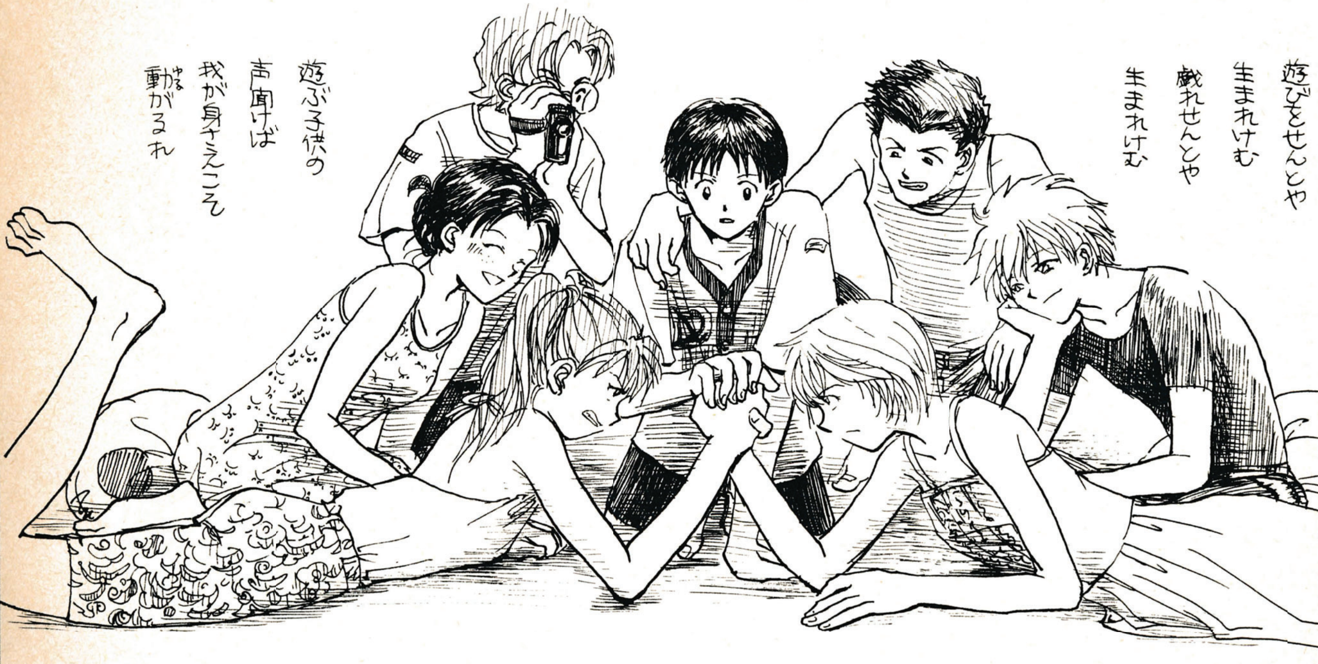
製作者サイドにとっては多分、ウィンチェスターハウスと化してしまったであろうエヴァ。私にとってはロングロングケーキとなった。
終わらないケーキ。大島弓子の作品である。いつか必ず終わる人生主人公は自分の永遠について考える。にいての永遠。

たかがテレビマンガ一つに何を深刻ぶってる、と思われるかもしんないけど、このエヴァ、もんのすごい命題を夕方のお茶の間に叩き込んでいたのだ。今更ながらに驚く。
人が人として生まれてくる意味。何をするのか、何をすべきか。人が人と関わることの必然。自分とは何か、自分の存在理由とは何か。世界とは何か。宇宙とは。時間とは。
♪ソッソッソックッラテスもプラトンもー、ニーニーニーチェもサルトルもー・・・というCMが太古の昔あった（ことを、ご存じの人は私と同じバーサンだ。）が、そんな賢い方々が、♪みーんな悩んでおーきくなったー・・・（しかも歌っていたのは野坂昭如）エラく賢い方々が一生をかけて悩み続けるテーマ。それもこれが唯一正しい考えだ、と言うものは何一つない。
我思う。ゆえに我在り。と言ったのは何処のどなた様だったか。今へたくそな文章を書いてる私は何だろう。脳が思うから私は脳なのか。だけど脳が在ったところで手がなけりゃ何も書けない。手が在っても脳が言葉を知らなかったら、手は動かない。描かなくちゃと脳は思うのに、全然すすまねー原稿は手と脳どちらのせいなんだろう。
私は誰。私は何。
朝起きて顔を洗って御飯を食べて仕事に、或いは学校に行く切羽詰った時間の中では、思い出すことの無い疑問。
お昼になって昼御飯食べて睡魔と闘いながら午後の仕事、或いは授業をやっつけているときにも、影も形もない疑問。
そんな日常をぱっくり裂いて現われる、かまいたちの中心の真空のような疑問。捕えようの無い、堂々巡り。
何故私はここに居るんだろう。
考え出すときりが無く、飯が不味くなるような人類永遠の謎を、よくもまあ夕飯どきにやってたよ。
14の時考えていたこと。「進路」という言葉とぶつかる度に、胸が締め付けられる様な痛みを伴った考え。
私には何が出来るんだろう。
同じことを、十年以上たった今も同じ痛みをもって考える。
終わってしまったけど終わらない。
あの14の子供たちと一緒に悩んだ。私にとっての永遠を。

※ウィンチェスターハウス
増築され続ける主不在のお化け屋敷。アメリカのどっかにある。

＊

「THE END OF EVANGELION」を観た。腰が抜けた。覚悟はしていたつもりだったのに、あまりの凄さに上映中胃が痛くなった。二回観たが非常にくたびれた。
公開前に友人とした夏映画予想など、本編の上映を前にしたら、ちゃんちゃら可笑しい戯言になってしまった。期待すると



痛い目見そうと、自分なりに悲観的なイメージを持って、免疫を付けたつもりだったが、心の何処かである種救い的なものを望んでいたらしい。しっぺ返しを食らった。
何かしら美しいものを人は最後に飾りたがるものだ。なのに、最後の最後まで製作者は己を貫いた。架空の世界ですら感傷を許さなかった。
第三新東京市と呼ばれた、何処かしら不思議なノスタルジーさえ、かもし出す街。その架空の街に逃げ込もうとした者達を徹底的に叩き出した。
上映後の劇場は葬式帰りの人の群れのようだった。いや確かに葬式だったのだ。終わったのだ死んだのだ。エンターテイメントであったエヴァは完全に葬り去られた。見事と言うほかはない。
思えば初めから墓碑銘は刻まれていた。春映画のラストで。そして今、手に残った前売りの半券に。
作品に満足して幸せな気分に浸った人はまずいないと思う。（あの綾波を見て、それでもまだ綾波最高と言える人はかなり豪胆な性格の持ち主だ。アスカ然り、シンジ然り。）
醜くつかみ合いの争いをし、罵声を浴びせかけ、物にあたり、何もかも相手のせいにする。確かにそれは人の姿だ。憎悪に駆られた人間の偽りの無い姿だ。だからこそ、他人に傷付くことがあることを知っても、他人の間で生きていく事を決めたシンジに何かもう少しソフトなフォローが欲しかった。（と思うことすら甘いのか？甘ちゃんなのか？なぁ監督。）
悪い夢を見ているのかと思われるほど凄惨な地上の風景。
これが、現実。遠くに見える、二つに割れてずれてゆく巨大な顔。恐ろしく歪んだ綾波の。かつて彼女であったものの。
アスカが助かったのはエヴァに乗ってたから？エントリープラグが運良く、量産機どもの刃先を逸れたか？他の人々は？戻ろうと言う気持ちがあれば戻れるとかユイは言ってたが・・
とにかく地上に生きているものの影は二つきり。
何故シンジはアスカを絞め殺そうと（途中までは本当に殺ったと思った。）したのか。現実世界の余りに凄まじい状況に絶望したのか？こんな所にたった二人だけ生き残ったことに？
自分の腹の上でぐしゅぐしゅとすすり泣くシンジをギョロリと目玉だけ動かして見るアスカ、侮蔑した声で「気持ち悪い」。
・・・・・・・・・・・・・・・・・
ほんとうにほんとうにこれでおしまい・・・？
あまりに生々しい嫌悪感だけが、じっとり後を引いている。
ああ、でも本当にあの子達が可愛かったよ好きだったよ。悩んだり苦しんだりする姿は胸が痛んだし、笑った顔を見せたときは弟や妹のように愛しいと思った。
14歳って心も体もぴかぴかな年なのにこんなにいろいろ背負っちゃって、もっともっと元気になって、世の中には素敵な、素晴らしいことがあるって事に気付いてほしいと、何時も思っていた。
もう何処にも居ないのだ。いや最初から居ないんだ。
もう何処の誰にもこんな作品は創れないだろう。
創り出した当の本人にも。

夏目隕石

‥とは言いながら、ここで同人やめたら彼等の思う壺のような気がしてけったくそ悪いんだよな。特にエヴァやる為に同人始めた私なんぞ、どーすりゃいーんだよ。気が済むまでエヴァやったらすっぱりやめてしまおうと思っていたけど、黒い固まりが胸の中でぶすぶす燻ぶり燃え残っちゃってる、不完全燃焼の矢吹ジョー状態。おっちゃんタオル投げんなよ。いやタオルはとっくに投げられた後だった。出遅れてハマった私。

全く僭越ながら庵野監督に一言申し上げたい。他人のコミュニケーション不全を気に病む前に、万が一また自殺念慮が出たときに袖を掴んでくれる人をつくってください。5月に友人が死んで、「死ぬこと」をぐるぐる沢山考えてしまった。それで至った結論。「死ぬまでは生きろ。」

ファンはエヴァの終焉をどのようにとらえているのだろうか。
一人一人の「さよなら」の気持ちを劇場出口で聞いてみた。

街頭インタビュー

福音書の最終章をむかえて

「エヴァは"謎"そのものでした」Eva was a riddle

The Coming of "Revelations"

●フクヤマサタカ　男性／23才／会社員
もう正直言って、皮肉とブラックユーモアに溢れたSFコメディー。ただ、終わり方が、続くのかどうかハッキリしない。

●坂口　男性／22才／ゲーム関係の経営者
やっぱりアニメだな。

●石川尚　女性／22才／OL
どうしよう、思ったままでいいですか。いろんな意味で考えさせられるものだったと思う。

●王（ワン）　男性／22才／留学生（台湾人）
気持ち悪い。残酷、外国人には理解しにくい。日本語ではなくて、内容が哲学的で難しい。でも、台湾にもエヴァのファンは沢山います。

●佐藤　男性／25才／フリーター
テーマや、シンジが自分と同調するところがあって、他人事に感じられない。

●べーちゃん（アダナ）　女性／21才／専門学校性
私にとってはうれしいエヴァ。何故かって言うと、アスカがちゃんと生き残ってくれたから。一番最後のシーンで、シンジと海でもめごとがあるんですけど、その時アスカが包帯していて、レイが包帯巻いているシーンと重なって、シンジにとってアスカは、レイの代わりになっちゃうのかなってゆうのがイヤでした。まあ、アスカが生き残ってくれてよかったかな。

●中野みゆき　女性／30才／アルバイト
最後のシーンの意味が分からなかった。シンジとアスカが海にいて、シンジがアスカの首を絞めるシーンがよく解らなかった。まぁ、全体としてはよかった。

●サカミチオ　男性／21才／フリーター
すごい宗教的になりすぎてるかなって気はするんですよ。普通の絵とかで例えるなら、ただ巧いだけの人気のある絵じゃなくて、作者の世界に入り込めるような絵で、そこまで深くつっこむ人には、すごく意味のある映画かなとは思う。普通に、軽く観るには息苦しいかなと思うんですよね。

●後藤　女性／22才／MACオペレーター
なんだか夏やっても意味が無かった。同じようなこと、何やっているのかよく解らないですね。まぁ、あれで終わりで良かったのかな。何が言いたいのって言うか、解らないと言うか、よく解ったというか、結局、最後は解らなかった。もうこれ以上言うとなんだか…。まぁ、面白かったです。

●モリタ　男性／20才／回路設計
終わり方が以外だった。何回も終わる終わると思わせといて、いきなりスパット終わる。春のを観て、監督は、みんなは納得していないって言っていたけれど、俺は結構納得したんです。3日前から毎日来てるんですよ。今日5回目です。やっぱりすごい好きなんですよ。世界観とか謎が多いじゃないですか。インターネットとかでいろいろやってるし。予備知識がテレビでも解らないじゃないですか。謎解き本やインターネットで謎解きとかやってるんですよ。それ見てたら監督の創りたかったものが分かるし、テレビだけでも深く考えれば謎は解けるんです。今週出張があるので、また来週見に来ます。

●キダユカリ　女性／17才／高校生
なんか綾波レイが恐かった。第1話からずっと観ていて、LDも全部買っているんですけど、とりあえず全部出してほしい、今、発売していないんです。春の方は2回観に行ったんですけれど、内容理解していないんです。すごく難しかった。まだまだ謎も解けてません。テレビ版だけで終わってればよかったような感じもします。こういう結果になるとは思いもしなかったので…。

●匿名（2人）　女性／20才・19才／OL
ストーリーが解りずらかった。ミサトさんの死に方が印象的だった。大きくなった使徒って何？

●匿名　男性／34才／会社員
観るのは2回目。期待裏切られた。現実より希望を見せてほしかった。でも、人の隔たりには厳しいものがあるから、アニメで生半可な希望は見せてはいけないのかもしれない。

●松岡哲也　男性／24才／OGルーム制作部ビーチバンク
1回目はよく解らなかった。2回目はさらに解りずらい。結末が無く実写も解りずらい。すごいところは、中途半端に面白いエンディング。斬新さは業界的。

●細井真央　男性／28才／工業製品モデラー
自分の中でのエヴァは終わった。実際の生活とオーバーラップさせてみると、モヤモヤが残る。25話に対して26話は、2001年に対して2010年を観て回答がでた時の様だった。

●椹裕久　男性／30才／映像制作
監督にあったが、編集は大変だったようだ。よく考えてみたい。

●芳賀貴彦・目崎拓真・君塚善寛・國中茜　男性3人／女性1人／18才／学生
終わり方が今一つ、普通に終わればまだ続きそう。なんだこりゃ。人生考えて夜眠れなくなる。人による放心状態って身近にもあるんだろうけど、理解不能。

●原昌徳　男性／33才／製本
テレビの方が良かった。観ていて苦しかった。作る方も限界だったのでは。自分の中では、まだ完結していない。もっとよく観なくては。

EVANGELION